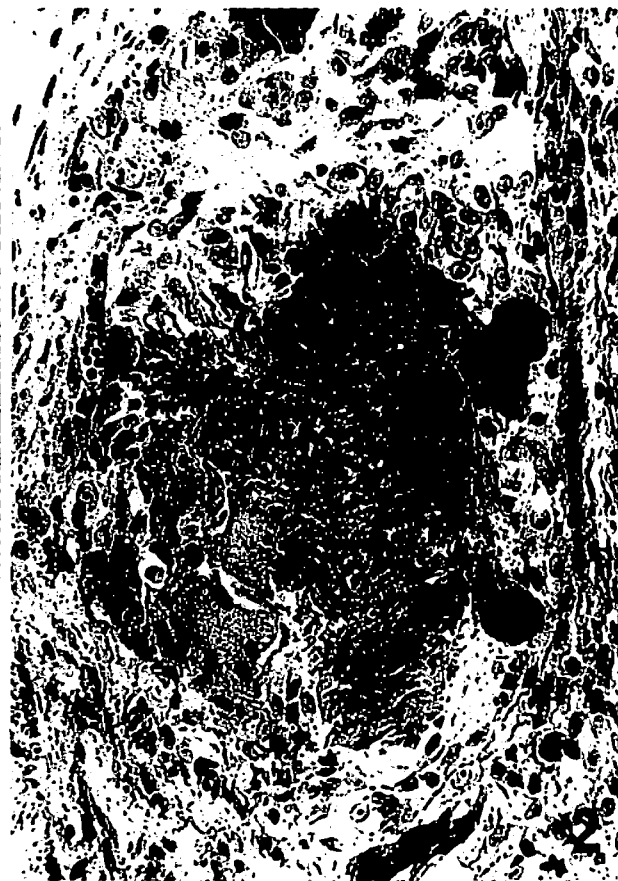
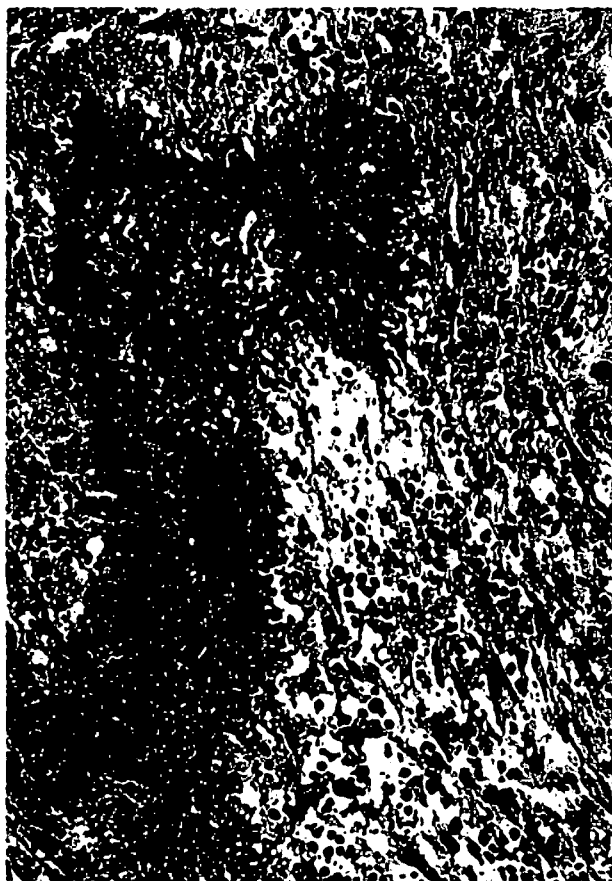


ネコの下前庭唇部の腫瘍

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会提出標本 No.238



提出標本は、3才の雄ペルシャネコの下前庭唇部に形成された腫瘍の手術摘出組織片から作成された。この腫瘍は下顎の両犬歯間に、周囲組織とは限界不明瞭に数mmの高さに隆起し、赤色調を帯びた肉芽組織様構造物として発現した。手術では、約0.5×0.5×1.0 cmの組織片が摘出された。腫瘍は手術実施の数か月前から気づかれていたが、治療薬に対しては応答しなかった。また、腫瘍は他の部位には認められず、全身症状もなかった。しかし、患部の触診は嫌うようであった。

組織検索では、病変は粘膜下組織に主座し、粘膜上皮には異常は認められない。病変は、膠原線維の壊死性変化と、この間隙における肉芽組織の増殖に要約される。

膠原線維壊死は、1～数本の線維がおかされる微小なものから、1個の肝小葉大に至る大型巣のもの(図1, HE染色, ×232)まで種々さまざまである。壊死に落ちいった膠原線維は、微細ないし粗大顆粒状に崩壊してエオシンに濃染し、アザン染色では赤染する。まれには膨化した線維も認められた。壊死巣の限界は尖鋭であって、境界線はしばしば放射状に見える。また、壊死巣周囲には反応性変化を欠く場合が多いが、一部では、異物巨細胞、類上皮細胞、線維芽細胞などの反応を伴っていた(図2, HE染色, ×328)。壊死巣内には細胞浸潤を伴わな

いのが普通であるが、時折その浸潤を受け、しかもそれが崩壊するため、その部はややヘマトキシリン調を帯びていた。また、壊死巣内には、しばしば正常膠原線維が散在性に遺残していた。

壊死巣間隙に増殖した肉芽組織は、多くの好酸球と若干の好中球、ならびに線維芽細胞から成り(図1)、新生毛細血管を伴う所もある。一部では、肉芽組織が線維化し、浸潤細胞が消退していた。

以上の病巣内には、グラム染色、レバディティ染色、PAS染色などによって、病原微生物を認めえない。

ここに示した病変と類同のものは、米国、西独の数編の報文中に記載されている。それによると、病変の座としては皮膚真皮が多く、これに付随するように口唇、歯肉においての病変形成が述べられている。病名としては、膠原線維壊死を伴った真皮内肉芽腫、皮膚線状肉芽腫、好酸球性肉芽腫、好酸球性肉芽腫群などが与えられている。

提出標本についての診断名は、「下前庭唇部粘膜下組織における多発性膠原線維壊死を伴った肉芽腫性炎」とするのが適切かと考える。本病変では、膠原線維壊死が強調されるべきであろう。肉芽組織の構成要素は、病変の時期によって異なるようである。なお、本病変は、アレルギー性炎を暗示しているようである。